

「シャッター通り」の商店街

日立・JR常陸多賀駅前通り

「福祉の街」で再生へ

3月のある出来事が発端だった。近所の公共施設で開催された障害者を支援するシンポジウム。民主党参議院議員の藤田幸久から参加を促された。

「どうしておれが」。最初は戸惑いがあった。だが、藤田とは中学から高校、大学までの10年間を同じ学び舎で過ごした親友。選挙を応援してきた間柄でもあった。藤田は福祉問題がライフワークで、とりわけ障害者福祉には造詣が深い。結局、誘いを断り切れず、会場に足を運んだ。

「障害者の時給は50円です」。主催者の「精神障害者を守る日立市民の会」（物井千寿子会長、会員60人）が、障害者を取り巻く劣悪な労働環境を説明する。続いて、5人の知的・身体障害者とその家族が、授産施設や作業所での体験談、社会生活への窮状などを次々と訴えた。

照山が福祉問題に興味を抱いたのは、昨年「悲痛な現実」であり、

高齢者、障害者の居住空間に

全国地方都市のモデルケース目指す

その悲哀に初めて触れた照山は、がく然とした。退院を余儀なくされ、そのあとに待っている壮絶なまでの家族の葛藤。その言葉の一つひとつに耳を疑った。

「精神障害者のケースの場合、知的や身体障害者と違って、家族の悩みはもっと深刻だよ」。100人ほどの参加者の中に、高校時代の同級生池内秀夫の姿があった。日立市内の精神病院でカウンセラーをして池内から、「切り捨て医療」の現状を聞かされた。

精神障害者に対する社会の偏見は、今も厳然として残っていると。病院側の事情で「切り捨て医療」の現状を聞かされた。精神障害者に対する社会の偏見は、今も厳然として残っていると。病院側の事情で

「切り捨て医療」の現状を聞かされた。精神障害者に対する社会の偏見は、今も厳然として残っていると。病院側の事情で

怒りと焦燥感。次第に照山の胸中には、二つの感情が渦巻くようになった。知的障害や身体障害者への取り組みに比べ、病状が診断しにくい精神障害者は、真っ先に切り捨てられる。国内では今、精神医療に対する政策や法制度の遅れが指摘されている。そうした中、秋葉原や荒川沖の無差別殺人など、動機が不明の凶悪事件が社会問題になっている。もちろん、こうした事案に対して、安易に精神障害者を想定することは許されない。

だが、藤田や池内らが見せた多くの患者の「実例」に触れるたび、その共通点もまた否定することはできない。そこには問題の根深さとともに、現代社会が抱える病巣や深淵（しんえん）に潜む闇を感じざるを得なかった。

照山は同支援法に対し、世間から「天下の悪政」と非難された後、期高齢者医療制度を引用し、「まるで予算がないから退院しろと言わんばかりの悪政だ」と憤る。昨年7月、「自分に何かできないか」と藤田に相談し、NPO法人「障害者の自立を支援する会」を立ち上げた。それは無策に等しい国への反抗でもあり、同時に「公助」に見切りをつけた瞬間でもあった。

「疲弊する全国の地方都市再生のモデルケースにしたい」。その第一号が11月に開設の予定で、すでに空きテナントの改装工事が急ピッチで進められている。照山がシンポジウムで受けた衝撃は、社会の底辺から聞こえた「魂の叫び」だった。今でも脳裏から離れることはなく、それが行動の原動力にもなった。シャッター通りと揶揄（やゆ）される商店街を舞台に、小さな「笑顔の輪」が今、確実に広がりを見せている。



「つどいの広場」の事務所前で照山さんは、商店街の盛衰に思いをはせながら将来の再生を夢見ている

「つどいの広場」の事務所前で照山さんは、商店街の盛衰に思いをはせながら将来の再生を夢見ている。開設した広場は、障害のある人やお年寄り

（敬称略、黒澤幹夫）